［特集］

大学図書館の変遷：学徒出陣から復興へ、そして、、、

文学部　加藤 好郎

平成最後の夏の甲子園

今年は、100回記念大会で、北大阪代表の高校が春夏連続優勝で無事終了した。今夏には初めて101万5千人を超える高校野球ファンが甲子園に詰めかけた。小生も、北神奈川代表の慶應義塾高校の応援に甲子園へ足を運んだ。1916年（大正5年）第2回大会で当時「慶應義塾普通部」として優勝した経験がある。ペットボトルの水を飲みながら、大いに楽しんだ。温暖化により天候が大きく変わりつつあり、今年は、台風が東から西に向かい、熱中症の40％が屋内という異常な暑い夏であった。我々の子ども時代には、「練習中には水を飲むな、疲れるぞ」と言われていた。しかし、なぜか熱中症にはならなかった。

甲子園を目指して涙にくれた球児は多いと思うが、思い出して欲しい言葉がある。小泉信三さんの『練習は不可能を可能にす』である。不可能を可能にした体験、フェアープレーの精神、生涯で最も大切な友との出会いである。もう一つ思い出して欲しい。73年前は、戦争の為、甲子園大会は中止された。この悔しさ、無念さを、現代の球児と比較するものではないと思うが、事実その時代があったことを、今後も毎年実施すると思われる大会を通じて8月15日の重さを感じて欲しい。学生諸君には、甲子園大会が続くことが如何に幸せであることなのかと実感して欲しい。もし、現代社会が成熟していると認識できるなら、個々人も成熟するように努力して欲しい。

学徒出陣、巡回文庫、本の疎開、そして図書館員の努力

第2次世界大戦で、日本は320万人の人を失った。軍人240万人、一般人80万人（国内50万人、国外30万人）。昭和19年4月1日付けで、慶應義塾は「開塾以来前例なき難局」により、老齢の教職員の退職を勧告した。当時の小泉信三塾長は、慶應義塾の建物が先輩たちの寄付によってあるとの考えから「自分はいまの慶應義塾の教授のなかで建物より価値があると思われる人物は、不幸にして発見することが出来ない」と述べた。当時の野村兼太郎図書館長は、建物を守るよりも教授の尊い生命を守るためには安全が第一と自宅待機を考え、塾長の一言に非常に不平を漏らしていた。つまり当時の日本の状況の中でややもすると、「人間」と「建物」の尊さについて信じられない価値観が出てくることもあった。

慶應義塾は、福沢先生以外に先生は存在しない。教員も「○○君」と呼ばれ、塾長以外に「長」はおらず図書館も監督と呼ばれていた。監督が図書館長になったのは、野村館長からだ。このことは、図書館の重要性を認識したからだ。同時に、その後、図書館長が次期塾長になることが続いた。昭和19年7月第一回図書疎開が行われ「三田の山」（慶應義塾の三田キャンパス、福沢先生の居住地）から新潟県中魚沼郡十日町西脇寛三郎方倉庫へ移動した。同10月第2回図書疎開は、甲府市和田平町寺田重雄方倉庫へ移動した。昭和20年5月に慶應義塾図書館に焼夷弾が投下され火災が起きた。結果、書庫を残して全焼した。因みに第3回図書疎開は、その後長野県更級郡稲荷山高村正平方倉庫へ移動した。

慶應義塾は、昭和18年11月に「出陣塾生壮行会」を行った。昭和13年4月「国家総動員法公布」、昭和14年7月「国民徴用令公布」、昭和17年6月「短縮繰り上げ卒業式」を行い、昭和19年8月「学徒勤労」が公布された。図書館員たちは、戦時中でも塾生たちに少しでも学問をさせたくて、重複図書をリュックに詰め「巡回文庫」と名付けて運搬し、塾生に読ませたかった。

「三田の山」に焼夷弾が投下された時、図書館の主事（事務長）は塾生（学生）80名が愛知県豊川海軍工廠に勤労動員としていたので監督役として出張していた。しかし、ここの工廠長の中将は、本を読ませることを許さなかった。「巡回文庫」は、勤労動員されている他の塾生にも、巡回する形で他の各地域にも図書は送られていたのだが、他の工廠では、「大学生なのにさぞ辛かろう。いつ死ぬか分からないからこそ、今、したい勉強をしておけ」と本を読ませる許可をした工廠長もいた。明日、死ぬかもしれない学生達に、最後の勉強をさせようという気持ちと、「今、お前たちに学問は必要ない。お国のために勤労することだ」。軍国主義の時代なんとも空しいことだった。

豊川の工場にいた図書館主事は、「トショカンヤケタスグカエレ」を電報で受け、すぐに終電車で豊橋まで、大船行の列車は満員で立ち通し、大船から藤沢へそして保土ヶ谷から歩いて横浜へ。塾生のトラックで鶴見の自宅にたどり着き、翌日「三田の山」に駆けつけると図書館はまだ時々煙が上がっていた。当時、国電に乗ると新橋駅から品川駅まで、車窓から焼けただれた慶應義塾図書館の姿を見ることができた。幸田成友君は「焼けた書庫の最上館の鉄骨が三田通り付近から、中天にかかって見るのは如何にも悲惨だ」。また、折口信夫君の様子を、図書館員は次のように述べていた。「折口君（先生）は、まだ燃えつづけている図書館をじっと見つめていた。やがて振り返って、ただ一言、本はといった。書庫には火は入っていない筈だと答えると、はじめて笑顔になって、何かと話しかけてきた」。教職員の誰しもが図書館の本が無事だったことを心から喜んだのは大学の生きがいそのもので、いつもあまり図書館は使わないと豪語していた人も、書庫が無事であったことが大学の救いであったと感じた。建物は焼けてしまい、「三田の山」の木々も緑を失ってしまい、人々も放心状態にあったとき、図書館の蔵書約40万冊の本が無事でいたことは、「大学が生きていけることを知らせる鼓動」であった。

図書館の再興こそが、大学の復興

終戦直後の状況について、図書館長は「その後の仕事というのは実に不愉快な仕事が沢山ありまして、その間、館員諸君に非常にいやな仕事をさせていたわけであります。特に、GHQがやってきたり、いろいろな仕事でアメリカ人、イギリス人が入り込みまして、いろんなことを言ってくるのが、実に不愉快でありまして、実に敗けるのは嫌だなと思いました。敗けた国というのは、いかに惨めであるかということを私はしみじみ感じました」と話している。

ここで、小泉信三塾長の図書館に対する認識、価値観の変化を述べておきたい。小泉塾長は、昭和11年8月から11月にかけて、ハーバード大学創立300年祝典に参列するために渡米をした。その際、米国の主な大学を見学しているが、その時の見聞が「アメリカ紀行」に収められている。小泉塾長は、研究と図書の保存についても、日本の大学図書館とは違った図書館の役割があることを、この時初めて知った。米国の大学生は、「授業時間は少ない」、「自分で読書すること」、特に「図書館を利用すること」が多い、そしてそれに対して図書館員が「よく教え、またよく奨励している」。つまり利用者への図書館員のサービスが行き届いていることに感服した。99日の旅程で、外見的な視察と、各地で大学、図書館に関する資料を集め、その後「米国の図書館の大学内における地位」などについても知る事になった。「チーフ・ライブラリアン（図書館事務長）」の重要性などという言葉を小泉塾長の口からじかに聞かされた教員、図書館員が多くいた。

昭和26年文学部図書館学科（日本図書館学校：JLS）が創設された。昭和26年イリノイ大学兼図書館学校長のダウンズ氏は「日本に図書館学校を作るための委員長」として来日した。25年4月に日本に「図書館法」が成立し図書館のサービスが拡大され、図書館員の資質向上が必要とされ始めた。図書館学校は、最初は、米国の資金で運営し、司書の養成・輩出によって民主的な図書館サービスが日本でも実施できると考えた。ダウンズ氏は、東京大学、京都大学、同志社大学、早稲田大学、慶應義塾大学を歴訪したが、西より東の方が地理的には好都合と判断し、また、日本の経済的な関係で、既設大学の一学科として付設する方が良いと考えた。ダウンズ氏は、慶應義塾長と図書館長に会い帰国し、25年末ワシントン大学図書館学科長ロバート・エル・ギトラー氏（文学部図書館・情報学科の優秀な卒業生に対して、ギトラー賞を設けた）を日本図書館学校主任の資格を持って来日させた。戦災後の教室等の貧弱さはあったが「慶應義塾の精神的特長が物的不足よりも高く評価され」同時に、ギトラー氏は「英訳『福翁自伝』を手にして，感激して慶應義塾に決めた」。

さいごに

図書館は「大学の心臓」であるということが一般に言われているが、日本では言葉だけのところも多々ある。小生はUCB（カリフォルニア大学バークレー校）の留学を通じて、「図書館は大学の心臓」ずばりそのものを経験した。キャンパスのど真ん中に物理的、精神的、学術的な支えとして図書館が存在しており、米国の大学図書館のスタッフの25％はSA（学生職員）が働いていることも新鮮だった。大学図書館は、図書館長・図書館員を中心に教職員、学生で成立している。

勿論、予算、蔵書の内容、図書館員の研修、学生への教育方法等、問題点は諸々あるが、多くの支援・理解を受けながら、まずは精神論として大学図書館は自立してほしい。図書館員は、図書館の運営を行っているプロフェショナル・ライブラリアンと、同時に、教員と一緒に仕事のできる生産性の高いサブジェクト・ライブラリアンも目指して欲しい。

参考資料

◎以下は、当時の慶應義塾図書館の統計を参考に添付します。
昭和20年図書・雑誌購入費21,547　和漢書228,992、洋書96,746
総冊数325,738　学生数　8,461人
昭和26年図書・雑誌購入費9,839,309　和漢書254,602
洋書103,184　総冊数357,246、学生数9,741人
司書・司書補22人（女子7名）雇用・用務員・嘱託13人（女子1名）
総計35名（女子8名）。

◎大学図書館学術情報基盤整備実態調査結果報告（2010）
レファレンス・利用者別:
教職員　国立（24.2％）公立（19.9％）私立（24.5％）国公私平均（22.8％）
学生　国立（59.5％）公立（52.8％）私立（68.5％）国公私平均（60.2％）
運営費:
人件費÷図書館の経常経費
国立（35.0％）公立（30.5％）私立（31.8％）国公私平均（32.4％）
図書館の経常経費÷大学の経常経費
国立（1.8％）公立（2.3％）私立（2.9％）国公私平均（2.33％）
※米国の「図書館の経常経費÷大学の経常経費」は因みに、最低3％～5％が必要とされている。

◎慶應義塾図書館史
慶應義塾大学三田メディアセンター　昭和47年発行（非売品）